常葉大学教育学部紀要〈論文〉
第43号　　2023.3.　　1頁～　24頁

『北電』掲載小説について　付・『北電』細目補遺1

Novels published in “Hokuden” magazine

戸塚麻子
TOTSUKA　Asako

（令和四年十一月四日受理）

抄　録

『北電』は、日中戦争期に北京で発行されていた日本語雑誌であり、日本の国策会社・華北電信電話株式会社の社員会雑誌である。社外の著名文化人や作家等の寄稿も少なくないが、本稿では華北電電の社員が書いた小説を取り上げる。

華北以外の外地を描いたもの、友情の物語、日中友好美談等、華北電電社員ならではの素材や、日中戦争下の日本人らしいテーマが選ばれている。また、社員が投稿した小説の半分以上が恋愛小説であり、社員たちの恋愛・結婚への関心の高さがうかがえる。これら恋愛小説においても、当時の北京や華北らしい描写をみることができ、社員にしか書けない作品が多く投稿されているといえる。

『北電』に掲載された社員の作品は文学的洗練や完成度の点で高いとはいえない。しかし、華北で働く華北電電社員たちの生活のなかから表れた作品群は、それなりに確かな感触を持っているものであり、ユニークな文学的形象と評することができる。

キーワード：『北電』　国策会社　華北電信電話株式会社　外地メディア　日本語文学

はじめに

『北電』は、日中戦争期に北京で発行されていた日本語雑誌である。日本の国策会社である華北電信電話株式会社の社員会雑誌で、月刊であった。表紙に「華北電電倶楽部発行」とあり、奥付には略称で「北電倶楽部発行」とある。創刊号は一九三九年九月一日発行、第三巻第一〇号（一九四一年一〇月一日発行）より発行所が北電興亜会に変更された。確認した最後の号は第六巻第一〇号・通巻第六一号（一九四四年一二月一五日発行）であるが、これが終刊号となった可能性が高い[1]。

興亜総本部調査部編『大東亜地域新聞雑誌総攬』（一九四五年）によれば、発行部数は二五〇〇部である。同じく華北の国策会社の社員会雑誌としては、華北交通社員会の『興亜』があり、それに次ぐものといえる[2]。

【図１】『北電』第３巻第１号、新年特別号表紙

華北の各所に社員が点在する華北電電の社員会雑誌であるため、社員同士の交流が雑誌の目的の一つであり、文芸・文化記事が多く掲載されている。また、娯楽の限られている読者を楽しませるために社外の著名文化人や作家等の寄稿も少なくない。

例えば、北京の文化界で著名な村上知行や石橋丑雄がいる。また、当時現地で唯一の日本語新聞『東亜新報』からは、社長の徳光衣城をはじめ、幹部の高木健夫や石川輝、幹部以外では戦後に作家として活躍する中薗英助や、芥川賞予選候補となった江崎磐太郎（本名・志垣忠）、歌人の早瀬譲らがいる。また、華北交通株式会社からは、幹部の城所英一、江川三昧（本名・江川一三）、石原巌徹（石原沙人）、八木沼丈夫、幹部以外では中島荒登や、文芸誌『燕京文学』主催の引田春海が本名・木田春夫で寄稿している。また、『興亜』編集から北支那開発株式会社にうつった詩人・作家の坂井徳三等、当時北京で発行されていた雑誌・新聞の常連が並んでいる。

また、当時北京にいた作家の佐藤俊子（田村俊子）、平田小六、北京師範大学で教授をし、日本帰国後も短歌欄の選者を務めた歌人の小泉苳三や、詩欄を担当した詩人の榎南謙一、元逓信次官で日本から俳句欄の選者をしていた富安風生、その他、大橋越央子、吉植庄亮、萩原井泉水等の俳人、佐々木信綱（ママ）、山口茂吉、斎藤瀏、植松寿樹、前田夕暮、森岡貞香、山本友一等の歌人、北園克衛、八十島稔、長田恒雄、笹沢美明等の詩人もいる。さらに、上海の内山完造も寄稿している。

こうした、文学者・文化人の書いたものはレベルも高く、読む本も限られていた華北電電社員を楽しませるものだっただろう。だが、本稿では、華北電電社員ならではの文芸、なかでも文字数も多い小説にしぼってみていきたい。

なお、本稿では、現在の調査で入手済みの四五号分のコピーまたは現物を対象とする。創刊号（一九三九年九月一日発行）～第四巻第二号（一九四二年二月一日発行）、第四巻第一二号（一九

四二年一二月一日発行）、第五巻第四号・通巻第四四号（一九四三年四月一日発行）、第五巻第五号・通巻第四五号（同年五月一日発行）、第五巻第八号・通巻第四八号（一九四三年八月一日発行）～第五巻第一二号・通巻第五二号（同年一二月一日発行）、第六巻第四号・通巻第五五号（昭和一九年四月一五日発行）～第六巻第一〇号・通巻第六一号（昭和一九年一二月一五日発行）。第四巻第三号～一一号、第五巻第一号～第三号、第五巻六・七号、第六巻第一号～三号の計一七冊は未見である。

以上四五冊のうち、創刊号～第二巻第一一号までは日本国内の大学図書館に所蔵されている。また、第五巻第四号～第六巻第一〇号までは（欠号を除き）北京の中国国家図書館に所蔵されている。これらの細目については、拙稿「『北電』（華北電電倶楽部／北電興亜会）細目」[3]を参照。

第二巻第一二号～第四巻第二号、第四巻第一二号の計一六号は筆者蔵。細目補遺として、前半を本稿、後半を拙稿「大陸文学のなかの〈郷愁〉と〈郷土〉―『北電』における桟朝男（懸橋浅夫・近東綺十郎）」[4]末尾に附した。

一　『北電』掲載小説の概要

本文または目次に「小説」「創作」とあるものの一覧は以下の通りである。本文冒頭等に記載されているジャンル名等は〈〉内に記した。

なお、「随筆」「小品」のなかには内容からみて小説としてもよいと思われるものが含まれているが除外した。「コント」「物語」「童話」も除いた。これらの中にも見るべきものはあるが、「小説」に比べて文字量も少なく、本稿では対象としない。また、ジャンル名が書かれていないものも除いた。

浪丘夜潮「友情の委曲」〈短篇小説〉、第四号
尾崎小浪「貫一と浪さん」〈滑稽小説〉、第二巻第一号
野田才造「干拓地」〈短篇小説一等当選作〉、第二巻第一号
鮎見驍「秋風の吹く街」〈短篇小説二等当選作〉、第二巻第二号
熊野隼人「初恋」〈短篇小説〉、第二巻第三号
槙田周平「青葉の下」〈短篇小説〉、第二巻第六号
村山直道「その夜の出来事」〈創作〉、第二巻第九号
村山直道「草原の丘」〈小説〉、第二巻第一二号
泊三四郎「魯東地区」〈小説〉、第三巻第五号
村山直道「鯉のぼり」〈短篇小説〉、第三巻第七号
水島杏介「凡作の縁談」第一回〈連載小説〉、第三巻第一〇号
立花一英「凡作の縁談」第二回〈連載小説〉、第三巻第一一号
柳川城太郎「莫逆」〈短篇小説〉、第三巻第一一号
懸橋浅夫「郷愁」全七回〈長篇小説〉、
第五巻第四号～第五巻第一〇号
阿賀利善三「桜婦人」〈辻小説〉、第五巻第一〇号
弓「灯　開封秘話」〈創作〉〈開封特輯〉、第五巻第一〇号
緑川玄三「呂順の燈籠」〈時代小説〉、第五巻第一〇号
阿賀利善三「伽羅」〈辻小説〉、第五巻第一一号
星川周太郎「忠君一刀流」〈時代小説〉、第五巻第一二号
柴田鉄造「戦列」全三回〈小説〉、

第六巻第四号〜第六巻第六号・通巻第五七号
星川周太郎「御茶壺様」〈大衆小説〉、第六巻第七号
猪飼源吾「夫妻反応」〈短篇小説〉、第六巻第八号
太田正「辺境の人々」全二回〈長篇小説〉、
第六巻第九号〜第六巻第一〇号
村松駿吉「母と飛行機」〈短篇小説〉、第六巻第一〇号

執筆者については、前半の第三巻までは、おそらくすべて社員であると思われる。本誌では、小説は掲載時に所属部署が記されることは少ない。しかし、他に詩・短歌・俳句、随筆等を投稿している場合は、そこから所属部署か勤務地を知ることができ、社員と判断できる。所属が不明の者も、作品の舞台や内容からみて、ほぼ社員であると考えられる。

なお、創刊号から第二巻第一〇号まで実質的な編集長をとつめた桟朝男は、第三巻第九号に寄せた「北電と小生」のなかで以下のように述べている。「最初からの予定で発行一、二年の間は、専ら社員雑誌の性格、形式の体系化に忙しく、外部の原稿も殆んど掲載しない方針をとつて来た」。そして、桟が「東京出張所」に異動になり、編集室を去ったあとも、しばらくの間は（小説に限定すれば、）外部への依頼はなされていないようである。

第四巻は欠号のため不明の部分が多く、第五巻では、桟が「懸橋浅夫」の名で「郷愁」を全七回にわたり連載した。この「郷愁」最終回と同号に掲載の弓「灯　開封秘話」は社員である。しかし、同じく同号執筆の緑川玄三や阿賀利善三、それ以降の星川周太郎、太田正、村松駿吉は日本内地の雑誌に執筆しており、社外の人間だと思われる。なお、星川は、第六巻第一〇号に「翼の軍神　関行男中佐の英霊を拝して」という文を寄せており、肩書は「日本文学報国会員」となっている。また、緑川の「呂順の燈籠」と星川の「忠君一刀流」は署名付きの挿絵が入っており（前者は小野沢亘、後者は山本寿正）、他の一般投稿より格上の扱いを受けている。（ただし、一九四四年に入るとさらなる誌面の縮小により、署名付き挿絵はカットされた。）また、柴田鉄造については、中薗英助が「現地除隊して毎日新聞の北京支局に」いたと述べている[5]。

以上、掲載小説をみていくと、創刊から第三巻までは、おそらくすべて華北電電の社員による投稿である。第五巻では懸橋浅夫（桟朝男）の「郷愁」が七回にわたり連載された。そして、「郷愁」最終回掲載の第五巻第一〇号に社外に依頼した小説が載り、以後は終刊まで外部の作品が毎号掲載された。他方、「灯　開封秘話」は開封の伝説をまとめた短い作品だが、それ以降社員による「小説」「創作」は掲載されなくなった。その理由として、誌面の縮小により「小説」の原稿募集を停止したこと、募集停止を受けて以前の小説の書き手が「小品」「随筆」等、枚数の少ないジャンルに移行したこと等が考えられるだろう。

次章以降、社員または社員と思われる人物が執筆した作品をとりあげ、紹介したい。なお、桟朝男（懸橋浅夫・近東綺十郎）と「郷愁」については、前掲の拙稿「大陸文学のなかの〈郷愁〉と〈郷土〉―『北電』における桟朝男（懸橋浅夫・近東綺十郎）」参照。

二　新年文芸賞

はじめに、文芸賞受賞作についてみていきたい。

第二巻第一号（一九四〇年一月一日発行）に「新年文芸当選作発表」が載り、野田才造「干拓地」（北京電報総局）が一等受賞作として掲載された。なお、選者であるが、短歌と俳句は外部に委託しており（短歌は城所英一、俳句は江川三昧、ともに華北交通の幹部社員）、「短篇小説」その他は記されていない。編集者の桟朝男が主に審査を行ったのではないかと思われる（桟以外の編集者は編集も文学もほぼ素人であった）。

以下は「干拓地」掲載時に附された作者略歴の全文である。

作者略歴　家貧にして十四歳の時古本屋へ丁稚奉公にやられ身近の本を乱読するうち文学に興味をおぼえた。

十八歳朝鮮に渉り、遠近の同人誌へ投稿して楽しむうち昭和八年半島文芸なる同人誌を主宰、一年余にして己が創作の為発禁の憂目にあひ廃刊した。

以上経歴らしきもの更になし、筆晦渋にして素質なきを嘆くのみ。〔傍点原文〕

「干拓地」は、黄海に面した朝鮮南端の羅川邑を舞台としている。日露戦争後の湖南線建設工事に人夫監督として渡鮮した喜平は、附近の農民に金を貸し、抵当の農地を取り上げることで財をなし、「羅川邑の有力者学校組合議員、陶器卸小売行」へと成り上がる。ところが、十万坪の干拓地を購入し、塩分を抜いて美田にしようと計画したことから、運命は転落しはじめる。三年経っても雑草も生えず、塩分を抜くための投資で財産は減っていく。陰口さえ叩かれ、羅川邑一の有力者の地位もライバルの郵便局長・横川に奪われてしまう。ついに干拓地を軍の飛行場として献納することを決意し、新聞に書かせて人々の称賛と尊敬を得たが、軍からは十万坪では足りないと断られてしまう。干拓地を眺め、「喜平はまだくたばりはせんぞ」「今に見とれ」と再び塩と戦う決意をする場面で終わっている。

入植した日本人の喜平が、朝鮮の貧しい農民を踏み台に成り上がり、その欲ゆえに再び転落していくさまが、ユーモラスに描かれる。そして、塩との戦いが続くことがほのめかされており、このままでいけば喜平の未来は没落しかないのであるが、「今に見とれ」とあきらめずに終わらせているところもひねりがあり、面白い。ただ、文章があまりうまくないところが惜しまれる。翌年の新年文芸懸賞（第三巻第一号）では野田は「短篇小説」部門の佳作となった（一、二等は該当作なし。）

三　友情物語―「友情の委曲」「莫逆」

『北電』には二つの友情の物語が掲載されている。

浪丘夜潮「友情の委曲」は、日本内地の地方の三等郵便局に勤める男性三人の友情を描いている。向学心の強い島・小倉・杉沢は、それぞれ困難を抱えながらも懸命に勉強し、出世していく。杉沢は盧溝橋事件以降、中国に関心を深め、ついには「北支」行きを決める。島は、病弱な妻と二人の幼児のため思いとどまるよう説得し、杉沢は諦めるが、二箇月後に腸チフスであっけなく死

短篇小説

莫逆

柳川城太郎

（一）

宿あけの血走つた眼には、朝の斜光が眩しかつた。

出勤を急ぐ人々の潑剌さの中を縫つて疲れた身體を運ぶ氣持はしらんしく、宿あけの日はいつでもそうであるように、今日も中原公司の街角まで來ると、その日の生業の幕を揚げる巷の人々の氣魄に壓されてそのまゝ歩き續けるのが苦痛に感じられる。

（コーヒーを飲みたい――）ふとそう思ふのであつたが、まだそんな時間に開けてゐる店とてなく、結局は喫茶店の前でちよつと立つて中を覗いて見ただけだつた。

「たゞいま……」

「あら、お歸んなさい。お疲れでせう」

エプロンの裾で手を拭きながら出迎へる妻の言葉に答へるのも億却で、くるりと背を見せると玄關に腰をおろして靴を脱いだが、座敷に上るともうすつかり掃除すんでゐて、南向きの窓一杯に斜光がかつと明るく、仮台には茶瓶の口からかすかに湯気が上つてゐる。

あけの日には特に注意して呉れるのか、重苦しい頭で歸つて來る自分の不機嫌を巧みに靜める初江の氣の配り方が難吉には嬉しかつた。

「御飯になさる？」

「うん、今顔を洗ふから……。マーコは？」

【図２】「莫逆」、『北電』第３第11号、26頁。

んでしまう。島は杉沢を殺したのが自分であると思い苦悩し、小倉は島に杉沢の遺志を継ぐよう勧める。島が「北支」行きを決意することがほのめかされて物語は終わっている。

なお、杉沢が応募した「北支」への第一回派遣とは、逓信省が行った華北電政総局要員としての派遣（一九三七年一二月二四日到着）であろう[6]。官営の華北電政総局は、一九三八年八月に民間の華北電信電話株式会社に再編された。杉沢の遺志を継いだ島が向かうのも華北電政総局から華北電電への道である。

「友情の委曲」は、内地の郵便局を舞台とした友情の物語で、友人の死を切っ掛けに「北支」に渡り、華北電電社員として働くという、まさに華北電電社員会の雑誌にふさわしい物語だといえよう。なお、浪丘夜潮は小説ではなく詩「黄河民族に寄す」によって、一九四一年一月（第三巻第一号）の新年文芸懸賞で一等をとっている。

同様に柳川城太郎「莫逆」も、友情の物語であるが、「莫逆」は外地が舞台となっている。華北で通信業務に就いている勇吉は、朝鮮の通信士・桜井康夫を勤務中に助けたことから知り合いになる。桜井は生活の困窮から華北への転職を希望し勇吉に相談するが、結局は商船会社の無線通信士に転職する。そしてある日、雄吉は、桜井の死を内地新聞の「護国の英雄・原隊発表」欄で知ることになる。

「莫逆」は、華北電電の社員が主人公という点、また友情を描きながらも最後に友人が死んでしまうという点で、「友情の委曲」と共通性を持つ（後者はまだ華北電電社員ではないが）。しかし、「莫逆」では、華北の「電信屋」の給料や境遇が、決して楽ではないものとして描かれており、勇吉は桜井に積極的に華北行きを勧めることができない。「莫逆」は、華北における通信業務や生活を理想化せず、その実態を描いているといえよう。

四　日中友好美談―「魯東地区」

泊三四郎「東地区」には、「此の一篇を前石島電報局長陳沢栄氏に捧ぐ」という献辞があり、事実を元にした小説であると考えられる。

中谷は接収班長として、魯東地区（山東省東部）にある中国の電報局の接収を行っていた。一方、石島電報局の沈沢成は、三〇

小説

魯東地區

此の一篇を前石島電報局長陳澤榮氏に捧ぐ

泊三四郎

——慥に人間の動く氣配であつた。蹤音こそしなかつたけれど碎き潜まされてゐる神經はピーンとそれを感じた。

リュックサックの枕に頭をつけたまゝ眼を閉じて息を殺してゐると遠くで微かに銃聲らしい音がしてゐるが、四邊はひつそりした靜寂の底にあつた。

中谷は用心深く起きて毛布からすべり出た——赤茶けた貧しい燈の下に、いづれも眞黑に日焦けした顏を並べた五人の班員達はグッスリ寝込んでゐて、班長が部屋を抜けだしたことに、誰も氣附く筈はなかつた。

春だと言ふに、眞夜の空氣は激しい冷さであつた。月はなかゝたが、星が眩しい程輝いてゐる空には、巨大な妖怪のやうに花崗岩の突兀たる山の眞黑い影が覆ひかぶさつて、その眞下に、低い家並が折重つて眠つてゐるのであつた。

中谷達の宿營した房子は、狹い院子を隔てゝ表の電報局と、裏の住宅とに接してゐたから、そのどちらに事が起つても すぐ判る筈であつたが、その後、コトリと云ふ音もなかつたとは云へ、締めて窓床に蹲る氣にはなれなかつた。

この三月の初めに、魯東地區電政接收の命令を受けた中谷は、接收班長として五名の班員達と共に、敗殘兵に脅されながら半月もの間、山東半島の山地を難行したから、やつと今日辿りついたのであつた。この石島には豐富な接收物件があつたのだ。班員達は明日からの仕事の喜びを思ひながらも、難行のつかれにぐつすりと寝込んでゐた。中谷とてもその氣持は同じであつたが、唯班長としての責任の重壓が、どうしても彼を眠らせようとはしないのであつた。

殆んど闇と云つてもいゝその院子を手探りながら電報受付溜の入口まで來たとき、中谷はギョッとして立ちどまつてしまつた。

そこには微かな燈の翳が漂つてゐるのである——その光は、事務室の一隅の電話ボックスと思はれる邊から流れてくるのである。

中谷は或る不吉な豫感に胸をつき刺された。あの電話ボックスの硝子扉の中には電報局の生命であるモールス電信機や電話機が封印して格納されてゐるのだ。

大日本海軍管理と大書された封印が、バリバリと誰かの手によつて剝ぎとられてゆく幻想が中谷を夢中で事務室に突入させた。

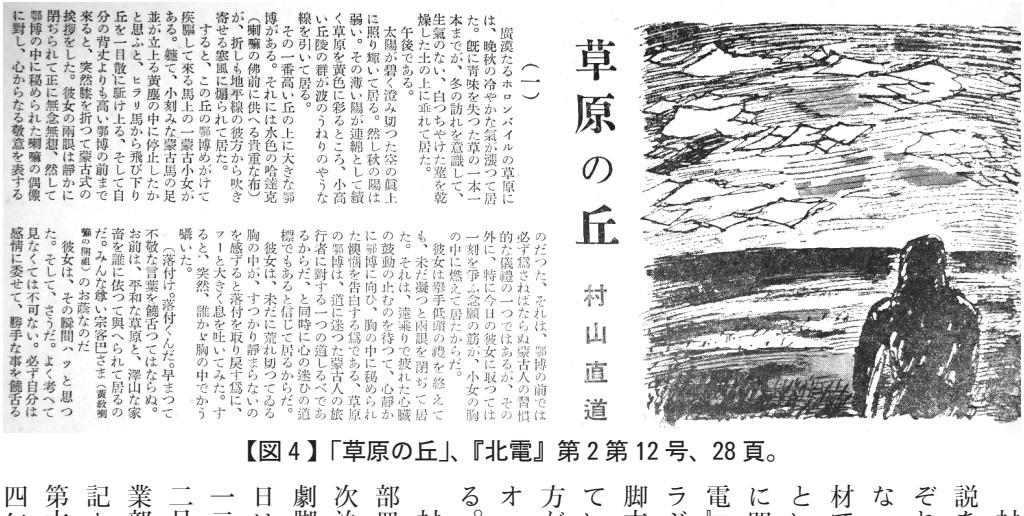
——ふりかへつたのは局長沈澤成の無殘にひき歪んだ顏であつた。胸の邊に支へもつた裸電燭の光の中に、悲痛に凍結した三白眼かあつた。もしもポカンと開けた口と、その汚れた齒列の奥から、荒々しい息づかひが聞へないとしたら誰しも彼が化石したものと思つたであらう。——やがて相手が中谷であることが判ると、それが次第に憐みを乞ふ

【図３】「魯東地区」、『北電』第３第15号、16頁。写真は魯東地区と思われる。
その他、文中に石島電報局の写真が挿入されている。

年間山東省の各所を転々としつつ電信生活を送り、その仕事に誇りと愛着をもち、山東省を第二の故郷として暮らして来た。しかし、「こんどの事変後」、日本の陸海と海軍が来るという噂が広まる。それに先駆けて八路軍（中国共産党）がやってきて、電信線路を破壊し、電信機と電話機を日本軍から隠すために接収しようとする。電鍵（モールス通信の送信等に使われる装置）を埋めて隠した沈沢成は八路から拷問を受け銃殺されかかるが、別の地域の市外電話機を提出することでなんとか釈放される。そして、一九四〇年二月一六日、ついに日本軍が上陸した。沈沢成は中谷に機器を提出した上で、自分と自分の電報局の運命は中谷に握られていること、「私の愛する電鍵」を取り上げないでほしい、と懇願する。中谷は沈沢成のために、陸海軍と交渉して華北電電会社への移管式を挙行し、沈沢成に「開扉」をまかせる。「勿論初代局長は沈沢成であつた」として、この物語は幕を閉じる。

「魯東地区」は、八路軍（共産党）を同胞である中国人を攻撃し、生活の安寧を奪うものとして残酷に描き、対する日本軍は中国人を保護する慈愛ある存在として描いている。このような八路＝悪、日本軍＝善という構図は、当時の日本人が書いた小説にしばしばみられるものである。また、仕事に熱心でかつ日本に協力的な中国人に対し、指導者たる日本人が温情を与えるというのも分かりやすい。献辞からも日中友好美談として書かれていることがみてとれよう。

五　村山直道



草原の丘

村山直道

（一）

廣漠たるホロンバイルの草原には、晩秋の冷やかな氣が漲つて居た。既に青味を失つた草の一本一本まで、多の訪れを意識して、生氣のない、白つちやけた寒を乾燥した土の上に垂れて居た。

午後である。

太陽が碧く澄み切つた空の眞上に照り輝いて居る。然し秋の陽は弱い。その薄い陽が連綿として續く草原を黄色に彩るところ、小高い丘陵の群が波のうねりのやうな線を引いて居る。

その一番高い丘の上に大きな鄂博がある。それには水色の哈達克（喇嘛の佛前に供へる貴重な布）が、折しも地平線の彼方から吹き寄せる寒風に煽られて居た。

すると、この丘の鄂博めがけて疾驅して來る馬上の一蒙古小女がある。軈て、小刻みな蒙古馬の足並が立上る黄塵の中に停止したかと思ふと、ヒラリ馬から飛び下り丘を一目散に駈け上る、そして自分の背丈よりも高い鄂博の前まで來ると、突然膝を折つて蒙古式の挨拶をした。彼女の兩眼は靜かに閉ぢられて正に無念無想、然して鄂博の中に秘められた喇嘛の偶像に對し、心からなる敬意を表するのだつた、それは、鄂博の前では必ず爲さねばならぬ蒙古人の習慣的な儀禮の一つではあるが、その外に、特に今日の彼女に取つては一刻を爭ふ念願の筋が、小女の胸の中に燃えて居たからだ。

彼女は擧手低頭の禮を終えても、未だ凝つと兩眼を閉ぢて居た。それは、遠乘りで疲れた心臓の鼓動の止むのを待つて、心靜かに鄂博に向ひ、胸の中に秘められた懊惱を告白する爲である。草原の鄂博は、道に迷つた蒙古人の旅行者に對する一つの道しるべであるからだ、と同時に心の迷ひの道標でもあると信じて居るからだ。

彼女は、未だに荒れ切つてゐる胸の中が、すつかり靜まらないのを感ずると落付を取り戻す爲に、フーと大きく息を吐いてみた。すると、突然、誰かゞ胸の中でかう囁いた。

（落付け〜落付くんだ〜早まつて不敬な言葉を餘舌つてはならぬ。お前は、平和な草原と、澤山な家畜を誰に依つて與へられて居るのだ。みんな偉い宗客巴さま（黄教喇嘛の開祖）のお蔭なのだ

彼女は、その瞬間ハッと思つた。そして、さうだ。よく考へて見なくては不可ない。必ず自分は感情に委せて、勝手な事を餘舌る

【図４】「草原の丘」、『北電』第２第12号、28頁。

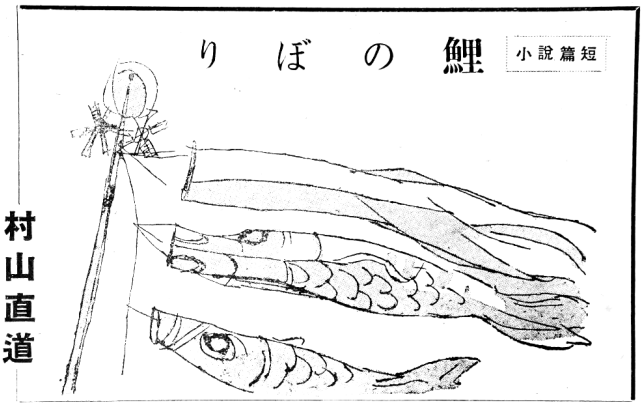
村山直道は三本の小説を載せている。それぞれ素材がまったく異なっており、幅広い題材で執筆できる人物だといえる。村山は演劇に関わっており、『北電』では、小説の他にラジオドラマや演劇の脚本、エッセイを載せている。むしろ脚本の方が中心であり、ラジオでも放送されている。

村山の社内での所属部署や職位は、「第三次治安強化運動放送演劇脚本」と冠した「明日は晴れ」（第三巻第一二号、一九四一年一二月一日発行）には「営業部業務課国際係」と記されている。また、第六巻第六号（一九四四年年六月一五日発行）では、「文書科記者室主任」となっている。

「その夜の出来事」は、タイトルの前に「自動電話周知宣伝用として……」とあり、中国人家庭に設置された自動電話の「私」が中国人家庭のトラブルを観察し語っていく。その中に電話会社の社員がきて、電話の使用法について詳細に説明する場面が挿入される。「私」は日本の工場から北京に来たが、北京と中国人が好きで、中国人宅に設置されたことを喜んでいる。村山には、国策遂行のために中国人と提携すべきだという考え方があり、啓蒙的な観点からこのような設定にしたのではないかと思われる。

「草原の丘」は、ホロンバイル高原（モンゴル高原東端）を舞台としている。「蒙古少女」の希宝は、旗公署に勤務する阿爾丹を愛していた。ある日、希宝の弟・察布の病気平癒を祈願するため、希宝一家の包に喇嘛僧と近所の人々が集まる。しかし、苦しむ察布をよそに、喇嘛僧はなかなか祈祷をはじめず、人々と談笑し、ついには阿爾丹の批判をはじめる。阿爾丹は「私達の楽土を犯す者」であり、「平和な草原から、私達の生命、財産である家畜を奪ひ取り、この清らかな世界を闇に導く大悪人」というのである。そして、父の章に、希宝を自分の元に来させるように言う。希宝は悩み、草原の丘の上の「鄂博」（蒙古の祠）の前で、胸のうちの懊悩を告白する。鄂博のなかの喇嘛の偶像に睨まれていると感じ、諦めて喇嘛僧の元に行きかけるが、そこへ風が吹いてきて、希宝は阿爾丹の匂いを嗅いだように思い、旗公署へと駆け下りていく。

「草原の丘」は「蒙古」の生活習慣や宗教を描きつつ、旧態依然としたものとして批判している。阿爾丹は作中に直接は登場し



月給日の出納係である。
窓口から白い手が出ると、社員貯金通帖を引つぱり込む。札がバラ〳〵と數へられる。金五拾圓也とハンコが餘白に賊される。パンと景氣よく日附印の音である。
「あら!!」
西川女史は貯金者の名を呼ばうとした時、輕い驚嘆の聲を發した
「あなただつたのね」
この貯金者は野呂君だつた。彼は返事をする代りに嬉しさうに微笑んだ。西川女史は、貫論の格子越しにチラリと野呂君を一瞥した。その瞳には感激と滿足を象徴させ、野呂君の胸に、嬉しいみたいな、切ないみたいな感情を與へたのである。
野呂君は北京の國策會社の社員で、厚生課に勤めてゐる。西川女史も同じ會社の出納係員である。
野呂君と西川女史が識り合つたのは、野呂君が、會社に入つて間もなくであり、丁度、今から一年前の春であつた。退社時に思ひもよらぬ夕立が來た。一週間前、忘れて社に置いた傘が役に立つて、野呂君は、意氣揚々と社を出ようとすると、一人の洋裝の女子社員が、茫然りと灰色の空を眺めてゐた。それが當の西川女史であつた。恐らく洋傘の拂底で困つてゐるのだらう。
野呂君は彼女の前を一寸素通りしたが、引つ返へして、
「お入りになりませんか」
と傘をさし向けると、西川女史は、スカートを繕つてゐる手を離

【図５】「鯉のぼり」、『北電』第３第７号、26 頁。

ないが、役所に勤めていることから、学のある若者であると思われる。そして、「家畜を奪ひ取り」という喇嘛僧の言葉から、放牧を止め定住生活へという施策を進めている人物であると想像される。阿爾丹が進める近代化のなかには、「蒙古」の宗教も含まれているだろう。それゆえ喇嘛僧は、恋敵であるという理由からのみでなく、阿爾丹を排撃しようとするのである。希宝は愛を貫き自由に生きるために、喇嘛僧と「蒙古」の宗教、古い因習から阿爾丹の元に「逃げ」ていくのである。

「鯉のぼり」は恋愛小説である。「北京の国策会社」に勤める「野呂君」は、同じ会社の出納係「西川女史」に想ひを抱き、「西川女史」も好意を抱く。「野呂君」は傷病兵慰問を取り仕切っており、「西川女史」にも出演を頼む。慰問演芸会の当日、かつて「西川女史」を棄てた元恋人で、子供の父親が現れ、「野呂君」は恋心を告白することなく、身を引く決意をする。最後に「鯉のぼりを坊やに送」ることを約して、物語は終わる。

「鯉のぼり」は北京の国策会社内での恋愛を描いており、『北電』読者には身近な話題を扱っているといえる。野呂君が、出納係の女性に恋したことでせっせと貯金に励み、その結果女性も野呂君に好意を抱くようになるところは非常に時局的であるし、演芸慰問で元恋人に出会うところなども、当時の華北らしい設定といえる。

むすびにかえて

以上、社員が書いた小説のなかから、いくつかを取り上げてみてきた。「干拓地」「草原の丘」等、華北以外の外地を描いたもの、友情の物語、日中友好美談等、日中戦争下の日本人による日本語表現らしい作品が並んでいるといえる。そして、「干拓地」「草原の丘」以外は、華北電電社員ならではの素材が選ばれているといえる。

恋愛をテーマとした作品が多いことも特徴であり、本稿で特に言及しなかった作品はすべて恋愛小説である。社員が投稿した小説の半分以上が恋愛や結婚に関連することから、社員たちの恋愛への関心の高さがうかがえよう。なお、華北電信電話株式会社は、

華北の他の国策会社に比べて女性社員の数が多く、社内恋愛がリアルなものだったと考えられる[7]。また、「鯉のぼり」でみたように、それぞれ当時の北京や華北らしい描写をみることができ、華北電電の社員や現地にいる日本人にしか書けない小説ということができる。

社員による小説は、外部に依頼した小説に比べ、一部の例外をのぞけば、文学的な完成度は高くないといえるだろう。この点は『興亜』に拠った城所英一や江川三昧、石原巌徹ら華北交通社員と大きな違いがある。彼らは『北電』にも寄稿し、城所と江川は短歌・俳句の選者にもなっている文学者であった。それに較べ、『北電』に掲載された華北電電社員の作品は文学的洗練や完成度の点で劣るといわざるを得ない。しかし、華北で働く華北電電社員たちの生活のなかから表れた作品群は、それなりに確かな感触を持っているものであり、ユニークな文学的形象と評することができる。

はじめに示したように、『北電』には他にさまざまな文学者・文化人が寄稿している。それらについては、今後の課題としたい。

---

1 北京の日本語新聞『東亜新報』の寄贈図書欄に、以降の号の掲載がないことから、これが事実上の終刊号となったと推測できる。

2 『興亜』の発行部数は前掲『大東亜地域新聞雑誌総攬』によれば三七〇〇〇部である。『北電』は『興亜』に比べればはるかに小規模といえる。なお、同書の刊行当時に残っていた社員会雑誌は『興亜』と『北電』のみであった。『興亜』については神谷昌史・戸塚麻子編『華北交通社員会『興亜』1939～1944―占領地北京の日本語雑誌』別巻（金沢文圃閣、二〇一二）収録の神谷昌史「われらこぞりたち共栄の楽土を成さむ―『華北交通社員会『興亜』1939～1944―占領地北京の日本語雑誌』解題」、及び戸塚麻子「『興亜』の文芸記事について」参照。

3 『論潮』第一三号、二〇二〇年、九九―一四〇頁。

4 『常葉大学外国語学部紀要』第三九号、二〇二三年。

5 「最後の兵たりし友」『記録者』第六号、一九九一年一〇月、一一二頁。

6 北電会編『華北電電事業史』電気通信協会、一九七五年、一一四頁。

7 前掲『華北電電事業史』（一一三頁）によれば、一九四五年一月三一日における社員数は以下の通りである。日本人男子・二、九八八名、日本人女子・六二四名。中国人男子・六、四七四名、中国人女子一二二三名。総社員数は一一、三〇九名である。

『北電』（華北電電倶楽部／北電興亜会）細目補遺１

凡例

一、以下は「『北電』（華北電電倶楽部／北電興亜会）細目」（『論潮』第一三号、二〇二二年七月）作成後に新たに入手した号（筆者蔵）の細目である。第二巻第一二号（昭和一五年一二月一日発行）―第四巻第二号（昭和一七年二月一日発行）、第四巻第一二号（昭和一七年一二月一日発行）の合計一六号である。表紙に華北電電倶楽部とあり、奥付は略称「北電倶楽部発行」となっている。第三巻第一〇号より北電興亜会発行に変更された。なお、紙幅の都合により後半を「細目補遺2」とし、『常葉大学外国語学部紀要』（第三九号、二〇二三年）に分載した。

一、書誌は各号の始めに刊行年月日、号数の順に記した。

一、細目は本文に即して採り、目次表題と異同の著しいものに限り＊を付し、各号末に注記した。中段が著者名、下段に掲載頁を記した。

一、仮名遣いは原文のままとし、漢字は原則的に新字に改めた。ただし、くの字点は現行のものに改めた。また、数字や記号などは原文のままとし、あえて統一はしなかった。

一、ルビがある場合は、（　）内に記した。

一、本文の表記のほか、各号の巻頭目次及び本文内容を参照して補訂した。

一、［　］内は補校訂・注記であり、本文には表記されていないものである。

一、誌上に設けられた各欄の名称は〈　〉内に記した。

一、目次や本文に分類内容が記されている場合は〈　〉内に記した。

一、著者名または発言者の肩書や居住地が記されている場合は（　）内に記した。なお、「忙中ペン」は執筆者の肩書が次号予告として前の号に掲載されているため参照し補った。

一、広告、軍事郵便は略した。また、標語は原則として省略したが、「総裁訓」等、作者が明示されているものは採った。

一、「支部だより」「支部通信」「北電ニュース」「北電青年」「電気通信学院のページ」「学院だより」「こども北電」等の細目は原則として省略した。

一、その他、留意すべき項目には＊を付し、各号末に注記した。

華北電電倶楽部

昭和一五年一二月一日発行（第二巻第一二号）

〈表紙〉　井上総裁・題字　吉田治・画

〈巻頭言〉大陸国策会社の新体制　奥井斉松＊1（会計科長）3

宣伝戦と電気通信　内野貞夫（本社回線係長）4-7

日支文化の性格　実藤恵秀（早大教授）8

胡同の初冬〈短歌〉　早瀬譲　8

内地経済事情　田崎与兵衛（同盟通信社調査部）9

或日は近し〈俳句〉　徳光衣城（東亜新報社々長）9

北京を描く（第一回趣味の座談会）

（出席者）美術会　難波六郎　亀井義男　岩崎金夫
磐井嘉一　安部正
写友会　堀朔太郎　杉山重男　植山武夫
村岡文雄
編輯部　吉田治（司会）　玉木綾子
穂積武子（速記）　10-11
北支点描　天野生　11
或る絵本〈コント〉　江崎磐太郎　12-13
全国電信競技会に出席して　古藤頼三（北京電報総局副局長）　12-13
工務課長会議に出席して　浅岡義雄（青島工務事務処長）　13
霊魂の秋〈詩〉　亀井義男　13
中国電務行政　5　中田治藤　14-15
洋と電〈閑話〉　石原沙人　15
北電春秋（十六）　和田総務部長　16
〈グラフ〉奉祝紀元二千六百年　民族の歓喜　17
〈グラフ〉〝あれこれ面倒味噌醤油〟北電住宅の
共同炊事　カメラ・村岡文雄　18-19
〈グラフ〉老北京　植山武夫　杉山重雄　20
〈北電どくしよ〉
読書随想　与田猛（営業部業務科）　21
良書推薦　永野浩三（総務部文書科調査係）　21
中野正晴（経理部主計科）　21
中本辰夫（営業部業務科業務調査係）　21
今月の新刊　21
〈随筆〉
数字と詩心　有田紀久滋（営業部企劃科回線係）　22
野菜と局長
五百倉義雄（本社営業部企劃科管理係長）　22
酔醒漫談　雲水散人　23
二つの寓話　平朔　23
連雲港　開局二周年を迎へて　天野久　23
短歌、俳句の選者　小泉苳三、富安風生両氏に決定
『北電』編輯部　23
〈小品〉夜勤　杉ひさ子　24
〈小品〉五号室の主　井上案山子　24
〈小品〉日記の一頁　綾路　24
〈短歌〉　夢エリカ　今井ゆき子　大島月恵　24
研究心　1　中川恭漢（青島電報電話総局庶務課長）　24-25
〈小品〉大空を仰ぐこころ　鈴木アキ　25
〈小品〉葦日記抄　矢真白　25
〈小品〉大陸女性の歌　執印照子　25
〈電気通信学院生徒の満洲見学旅行記〉
感想　谷川盛之　26
草原の丘〈小説〉　村山直道　27
奉祝二千六百年〈短歌〉　内海一枝　28-29
〈忙中ペン〉秋風の話　野田才造（北京電報総局）　28
三笠宮殿下に拝謁　日本卓球協会よりも表彰
土村勝喜氏の栄誉　久我　29
30

〈支部便り〉　30-31
〈ばあかあ問答〉もしも彩票があたつたら　当留前曽衛　30
〈ばあかあ問答〉一万円の行方　座間三郎　30
〈映画〉北京と映画　木田春夫　31
〈婦人〉信用してもいい　北条まち代　32
〈婦人〉北支の男性　青山翠　32
〈婦人〉北京の殿がた　大高子　32
〈婦人〉〈女性の窓〉一年を省みて　大島月恵　32
〈婦人〉〈本社女子社員の現業見学記〉
始めて見た現業　外村せい　33
現業の皆さん有難う　里野菊代　33
電話局で　よしゑ　33-34
〈こども北電〉　33
〈婦人〉羽子板の話　Ｉ　岩見盛也（臨楡電報局）　34
〈婦人〉代用食とおやつとしての馬鈴薯料理
鈴木道代（経理部主計科）　34
〈婦人〉国婦実施行事／九月国防献金取扱報告　34
〈編輯室〉　芋田吉太郎　吉田治　玉木綾子　難波六郎　34

＊１　目次・本文ともに奥井「斉」松とある。他の号ではすべて「斎」となっている。

昭和一六年一月一日発行（第三巻第一号　新年特別号）

〈表紙〉　井上総裁・題字
念頭の辞　井上乙彦　3
高度国防国家建設と大陸通信事業の任務　奥井斎松　4-6
小春〈俳句〉　大橋越央子　5
華北に於ける敵抗戦力　共産八路軍の動向を視る
関原利夫（東亜新報記者）　6-7
老北京の面貌〈随筆〉　吉植庄亮＊１　7
会社（ほくでん）の新体制を語る　青年部会主催座談会
和田総務部長　武藤常任幹事　三崎常任幹事
島越常任幹事　安部正　中本辰夫　中野正晴
佐藤五郎　松本力松　高見文昭　8-13
女人風景〈絵と文〉　小野佐世男　9,10,11
日本新政治の展望　木原通雄（政治評論家）　12-13
開封素描　真川生＊２　13
〈新年文芸当選作品発表〉　14
一等当選詩　黄河民族に寄す
浪丘夜潮（経理部主計科）　14
随筆二等当選作　懐郷賦　与田猛（営業部業務科）　14-15
随筆三等当選作　友情　三杉恵（営業部業務科）　15
記録宣伝用写真懸賞募集　15
北電春秋（一七）　和田総務部長　16
〈北電新春取楽児〉
北電漫画一　ミツイ生（済南）　17
時局漫才　片恋　北電トンツー　北電ベルコ　17
北京報の歌（隣組の替へ歌）　花輪咲子　17
北電漫画二／三／四／五／六　光井生（済南）　17,18

北電川柳　17
漫才　蘭印　アチヤラ　コチヤラ　18
〈ばあかあ問答〉「私が結婚したならば」　井上雅緒　18
〈ばあかあ問答〉私が結婚したならば　藤村雄平　18
〈特輯グラフ〉北電女子社員特輯　19-22
興亜の窓をひらく乙女立達
〈ユーモア・コント〉スツポン　杉平仁介　23
門神に就て――表紙絵の解説――　23
中支瞥見　1　井上逸機　25
〈ふるさとの正月風土記　特輯〉
江戸の初春　渡辺音二郎　26
新体制的正月　小堀泰一郎　26
おけら貰ひ　京都　平田義三郎　26
杳かなる追憶　長崎　懸橋浅夫　27
干鰤雑煮　兵庫の巻　和田芳男　27
信濃の春　長野　小宮山生（営業部企劃科）　27
国府宮の裸祭　愛知　小川忠二（天津工務事務処庶務課長）　27
三河万歳［絵と文］　藤村雄平　28
やなぎのはし　埼玉　服部勇（北京電報総局勤務）　28
雪の新潟　亀井義男　28
神楽正月　滋賀の巻　西山弥一郎（青島電報電話総局）　28
雪の福井　奥村小市（保定電報電話局長）　29
玉せゝり　福岡　野田才造（北京電報総局）　29
どんどや　熊本　友枝参（技術部搬送科無線係）　29
正月の星〈随筆〉　村上知行　29
〈どくしよ〉
動物への愛情　粟村中　30
山ちかちか＝図書館に来る子供たち＝　本田よしみ　30
読書余禄　2　渡辺音二郎　30-31
今月の新刊　31
〈ふるさとの正月風土記　特輯〉
あもとおばやき　山口の巻　光井信雄（済南電報電話総局）　30
沖縄のお正月　嵩原太郎（北京電話総局）　30-31
高千穂の春　瀬戸千代子（北京電報総局）　31
北京の冬〈随筆〉　佐藤俊子　31
〈支部だより〉　32-33
第二回槐樹句会／熊谷直実歓迎句会／天津句会　32-33
〈ふるさとの正月風土記　特輯〉
古独楽と針打　鳥取の正月　杉本良一　32
はたはた　秋田　佐々木国之助（北京電話総局）　32-33
凧の会　徳島　井上友明（天津電報電話総局）　33
切り初め　山口　三上智与熊（営業部企劃科）　33
〈忙中ペン〉若いこころ　光井信雄（済南総局）　33
〈趣味　娯楽〉
スケーチングの基礎　秋山文幾（技術部機械外機係）　34
〈囲碁〉出題にあたつて　七段　瀬越憲作　35
〈将棋〉詰将棋第一回新題　名人　木村義雄　35

〈映画〉〈映画物語〉浪花女　34-35
〈映画〉〈映画随筆〉映画と北京　紋太十　35
〈婦人〉お正月のお化粧法　山本鈴子（テルミ・ハウス）　36-37
〈婦人〉〈女性の窓〉随想記　西山君枝　36
〈婦人〉現地の婦人服装に就て　脇本きみ子　37
〈婦人〉戦線便り　呉正雄　37-38
〈こども〉　37
〈婦人〉羽子板の話　2　岩見盛也　38
〈婦人〉国婦分会行事／国防献金取扱報告　38
〈編輯室〉　難波六郎　玉木綾子　吉田治　芋田吉太郎　38

＊1　末尾に「歌人・雑誌「橄欖」主宰・近著「大陸巡遊吟」あり」とある。
＊2　目次には「直川生」とある。

昭和一六年二月一日発行（第三巻第二号）

〈表紙〉　井上総裁・題字　能勢春泥・画
〈巻頭言〉渡支感あり　金光昭（企劃科長）　3
ドイツの占領地工作　矢野武夫（満鉄東京支社調査室）　4-5
戦争と電気通信　1　中山竜次（電気通信協会々長）　6-8
日本的衣食住―大陸生活将来の問題―〈随筆〉　斎藤清衛（北京女子師範学院教授）　7
女人風景〈絵と文〉　小野佐世男　8,16,26,27
北電春秋（一八）　和田総務部長　9
中国電務行政　6　中田治藤　10-13
電気通信学院の特異性　有川博基（電気通信学院副院長）　11
黄村受信所局舎及社宅新築工事概要　技術部機械科局舎係　12
北京行車中〈俳句〉　萩原井泉水　13
〈北支あちこち〉唐山　八島茂弓　14-15
〈北支あちこち〉博山　川久保生　14
〈北支あちこち〉新郷　前原太一　15
〈北支あちこち〉膠縣　膠縣局同人　15
中支瞥見　2　井上透機＊1　16
回覧板　16
〈グラフ〉〝餅落し〟寒風を衝く　17
〈グラフ〉希望の若人　電気通信学院生徒の生活　杉山重男・撮影　18-19
〈グラフ〉挺身する慰問隊　20
バスに揺られて百幾里　北京在留日本人挺身慰問隊に参加して　三沢清香　21
〈小品と随想〉
東京の灯　服部勇　22
すらむぷ＊2　藤村雄平　22-23
少女の頃＊3　綾路　23
〈二等当選詩〉白河　近木健弍　23
喫茶室で　新田直　23-24

技術現業の使命達成に邁進せん　史通（北京工務事務処長）24
電気通信学院分校舎竣功　営繕係同人　24
〈小品と随想〉
新体制と我々　春野光雄　24
棚卸を終りて　杉本生（天津補給処長）24-25
蒼空無限　山岡婦美子（北京電話）25
五行随想　でくの坊生　25
電話局運営の話（1）　益田英治　25
砕氷船　1　高瀬幸正　26-27
実業人の態度　東洋山人　27
〈忙中ペン〉　八島茂弓（唐山電報電話局）28
〈どくしよ〉
読書余禄（三）　渡辺音二郎　28-29
今月の新刊／資料新着書紹介　28
「私の研究」新設通告　29
〈映画〉映画と国策と文学　紋太十　29
〈支部だより〉　30-31
〈囲碁〉詰碁第二回新題　瀬越七段　35
〈将棋〉詰将棋第二回新題　名人　木村義雄　35
〈ばあかあ問答〉酒煙草をやめませんか　相撲王　31
新年黄城句会　六郎　31
〈婦人〉
美容の科学性　山本鈴子（テルミ美容院主）32
〈女性の窓〉地酒の味　玉木綾子　32
洋裁誌上講習　Ⅰ　脇本きみ子（ワキヤ洋装店）33-34
〈こども〉
さむい朝　内藤洋樹（二年）33
おうちで楽しくあそんだこと　薄羽恵美子（三年）33
梅　福井信子（四年）33
雨の胡同　薄羽照代（六年）33
〈婦人〉羽子板の話　3　岩見盛也　34
〈婦人〉国婦実施行事／国防献金取扱報告　34
〈編輯室〉　芋田吉太郎　吉田治　玉木綾子　難波六郎　34

＊1「透」は「逸」の誤り。
＊2　末尾に「新年文芸小品三等当選作」とある。
＊3　末尾に「新年文芸三等当選小品」とある。

昭和一六年三月一日発行（第三巻第三号）

〈表紙〉　井上総裁・題字　能勢春泥・画
北京風景〈絵と文〉　古家新　3,23,26
〈巻頭言〉時局と我等　松田泰彦（搬送科長）3
翼賛議会の収穫　下野信恭（内閣情報官）4-7
戦争と電気通信　2　中山竜次　6-8
電話公益優先受理の概況に就て　古島正義　8
雷公電母を語る〈随筆〉
石橋丑雄（北京特別市公署社会局観光科）9
記録宣伝用写真懸賞募集　9

北電建設部隊の座談会　我等北電と共に!!　編輯部主催　10-13
（出席者）技術部　植田外線係長　江原調理（前外線）
係長　山下民十郎　鈴木高広
三石量平　松本利一　渡遺近吾＊1
石兼武光　斎藤安之助　坂東安雄
定兼哲
北京工務事務処　佐野政雄　畠山留吉　上原修一郎
片山伊太郎
天津工務事務処　松田音松　徳森熊次郎
警備隊　白井副隊長　藤本小隊長
編輯部　諏訪社員倶楽部事務長
芋田吉太郎　吉田治
速記　穂積武子
武装なき戦士〈事実物語〉　磯水生（済南工務）11-13
前線社員の手記を募る　13
東洋古代史小考　Ｉ　永野浩三　14-15
電話局運営の話（2）　益田英治　14-15
山東省に於ける済南の経済的地位（1）
済南電報電話総局同人　16-17
石門素描　益田英治　16-17
徳州よい街〈歌謡〉　崎谷文雄　17
〈私の研究〉　穂積武子　17
「私の研究」新設通告　17
北電春秋（一九）　和田総務部長　18
〈特輯：グラフ　北電建設部隊の進軍譜〉　19-22
讃美歌〈コント〉　江崎盤太郎＊2　23
技術者の登竜門開かる　電気通信技術者
資格検定制度の実施!!　浅岡義雄　24-25
中支瞥見　3　井上逸機　26-29
〈随想〉
髭そりの話　妹田吉太郎　26-27
偶感四題　滝井理一（技術部搬送科無線係長）　27
青島から天津へ　秋田徳三（天津電報電話総局
電信処豊領事路分局長）　27
遺臣〈詩〉　浪丘夜潮　27
北電風物詩　大北逸男＊3　28
〈随想〉
中国の電報人に就いて　凪英太郎　28
手近なはなし　石川三郎（天津電報電話総局）　28-29
春を待ちつゝ　穂積武子　29
一時代　近木建弌（天津電報電話総局
電信処海大道分局）　29
短歌募集　29
ノートより　悠貴　29
〈読書〉読書余禄（三）　渡辺音二郎　30
〈読書〉黄土の栞　高屋正武　30-31
〈窓〉窓　凪英太郎　30
〈窓〉手紙　前線の友より来れる　城谷武彦　30
〈窓〉感じた無駄　青人生　30
〈窓〉回顧録　武井秀一（定縣電報局）　30-31

〈窓〉私の見た中国人　水瀬キク　31
〈窓〉膠縣局員のプロフキル　膠縣子　31
〈忙中ペン〉健吉酒談　藤岡瑛（青島総局）　31
〈趣味〉釣の話　人見平内（技術部内線係長北京釣魚会副会長）　32-33
〈将棋〉手駒の活用（第一回解説）　名人　木村義雄　33
〈囲碁〉第一回解説　七段　瀬越憲作　33
〈支部通信〉　34-35
お嬢さんたちに〈詩〉　近木健弍　36
〈婦人〉大陸に嫁ぎて　伊藤宮子　36
〈婦人〉私の職域奉公＝事務員として（放送原稿）　穂積武子　36-37
〈婦人〉〈女性の窓〉午後の休憩室で　大島月恵　36
〈婦人〉〈女性の窓〉省みて　原美佐緒　36-37
〈婦人〉私の職業奉公＝電話事務員として＝（放送原稿）　川本イシ　37
〈婦人〉〈女性の窓〉寮生活の一端　折尾栄　37
〈婦人〉国婦分会行事　37
〈こども北電〉　37
〈句会通信〉天津句会／天津新年句会／槐樹句会／慰安川柳大会／慰安俳句大会　38
俳句募集　38
〈編輯室〉　吉田治　芋田吉太郎　難波六郎　38

＊1　誤植か。本文には「渡辺」とある。

＊2　本文・目次ともに「盤」とあるが、正しくは「磐」である。
＊3　目次では「逸南」。

昭和一六年四月一日発行（第三巻第四号）

〈表紙〉　井上総裁・題字　高屋正武・画
〈巻頭言〉春風春水一時に到る　上田清也（文書科長）　3
更生華北を語る（華人社員座談会）　4-7
張仁侃（輔導室事務長）　羅錦（北京電話総局長）
曹禧長（北京電話南分局長）　劉国麟（北京電話南分局）
計培厚（通信学院）　楊長（北京電報総局）
凌文炳（北京電報総局）　馬貴恩（北京工務事務処）
何瑾環（弘報室）　劉徳成（北京工務事務処）
上田清也（文書科長）　難波六郎（編輯部）
芋田吉太郎（同）　羅純倬（同）
治安確保は我等の責務（訓示）　井上総裁　6-7
北支に於ける中共の現状　橘清志　8-9
電話局運営の話（3）　益田英治　9
支那と国際電気通信条約及東亜電気通信協定との関係　渡辺音二郎　10-11
北満義勇隊訓練所雑記　与田重郎　10-11
〈随筆〉レロード漫語　三木満千夫（経理部主計科）　12-13
〈随筆〉回顧一年　木佐貫生　12-14
〈随筆〉内地あちゝち　難波六郎　13-14
短歌　小泉苳三選

茂木かよ子（北京）　山本猛（天津）
木村好之助（北京）　13
〈随筆〉住宅難と温突　熊谷今朝蔵　14
〈北電風物詩〉喫茶室／プール　阿部吉男　14
興亜テスト　14
〈随筆〉支那の乞食　高瀬幸正　15
〈随筆〉断想　心猿生　15
〈私の研究〉支那色　高屋正武　15
改善意見二題　膠縣電報電話局同人　16
〈電信漫詩〉テレガラフ　凡平　16
〈詩〉　16-17
白井正夫（北京電報総局通信課）　村田みどり
（北京電報局通信課）　矢真白（北京電部総局）＊1
山岡婦美子（北京電話総局）　稜路＊2　悠貴
北京ゆめじ（北京電話総局）
原美佐緒（北京電話総局）
電報局位置の再認識に就て　益田英治　17
〈北電漫画〉　光井信雄（済南）　17,23,25
北電春秋（二〇）　和田総務部長　18
〈グラフ〉北京神社植樹奉仕隊　19
〈グラフ〉翼賛北電一家　20-21
〈グラフ〉挺身演芸慰問隊　22
挺身演芸慰問の記　北京電話総局和光会同人　23
大陸に嫁ぎて（新婚座談会）　24-25
（出席者）浜田礼子　服部信子　林田つた
小島光子　江口きみ　新井フミ子
（司会）穂積武子（編輯部）難波六郎
委託生の近況　斎藤忠四郎（電気通信学院）　26-27
〈北電歌壇　小泉苳三選〉　26
山城敏一（北京）　若佐幸三郎（青島）　山岡婦美子
（北京）　高橋健治（北京）　西山君枝（天津）
杉山幸子（北京）　山形貞夫（青島）　泉田保兄（北京）
美恵（天津）　大島月恵（北京）　悠貴（北京）
岡村繁人（北京）　山口美発（北京）　高橋勇（北京）
崎谷佐六（徳州）　斉藤哲作（北京）　瀬戸千代子
（北京）　種子田種義（天津）　今井ゆき子（北京）
よしゑ（北京）　ますみ（北京）　矢車草（陽泉）
井上義一（周村）
選後に　小泉苳三　26
〈北電俳壇　富安風生選〉　27
小川忠二（天津）　福田葦村（天津）　服部五三六
（北京）　星野晃（天津）　山口勇（天津）
山岡婦美子（北京）　青野正明（北京）　綾路（青島）
矢真白（北京）　井上松月（周村）　荒谷耕山（北京）
佐藤誓史（北京）　崎谷佐六（徳州）　長塩昇（天津）
ますみ（北京）　よし君（北京）　三浦兆々（天津）
山口美発（北京）　井上雅緒（天津）　一甫（天津）
岡村繁人（北京）
選後小感　富安風生　27
春を待つ心　近東綺十郎　28-29

〈私の体験を語る（放送原稿）〉　中溝正雄　28
塩都海州を世界に結ぶ一瞬！　竜井理一　28-29
現地国策会社々員としての体験を語る　松本力松　29
亜細亜の為に　渡辺音二郎　30-31
〈読書〉読書余録（五）　金光昭　30
〈読書〉風土――人間学的考察（和辻哲郎著）　30-31
〈読書〉今月の新刊　31
〈読書〉資料室新着書紹介　五百倉義雄　31
〈読書〉対支文化工作草案等　高見文昭（北京電話総局）　31
〈忙中ペン〉私の文鎮　田辺富次郎　32-33
現地国策会社青年社員の職域奉公に就て　花輪咲子　32
〈北電歌謡〉これも翼賛　阿部吉男　32
〈窓〉窓の歴史［詩］　豊田正一　32
〈窓〉綴方　ＡＢＣ　32
〈窓〉三月号を読んで　素石生　32
興亜テスト答　秋田徳三　32-33
〈窓〉徐州だより　三杉恵　33
〈窓〉天津短信　33
〈女性の窓〉かへりみはせじ　済南電報電話総局同人　34-35
山東省に於ける済南の経済的地位（２）　田中生（定縣）　34-35
薬王廟参拝記　名人　木村義雄　34
〈将棋〉飛角の協力（第二回解説）　七段　瀬越憲作　35
〈囲碁〉二つの妙手（第二回解説）　粟村中　35
〝北電一家〟の歌［歌詞］　35
〈こども北電〉　36-37
〈支部通信〉　36
記録宣伝用写真懸賞募集
〈句会通信〉天津北電句会／天津句会／天津北電川柳会／北電短歌会　38
〈編集室〉　難波六郎　吉田治　玉木綾子　芋田吉太郎　38

＊1　正しくは「北京電話総局」か。
＊2　「綾路」の誤植か。

昭和一六年五月一日発行（第三巻第五号）

〈表紙〉　井上総裁・題字　吉田治・画
〈巻頭言〉雑感　間世田益穂（業務科副課長）　3
通信文学出でよ　第二回趣味の座談会　4-6
（出席者）鳥越定一　田中豊　村山直道　工藤直衛
猪飼源吾　亀井義男　阿部吉男　山城敏一
（編輯部）難波六郎
〝北電賞〟制定　職場から生れた芸術作品を表彰　北電編輯部　5
通信事業のサービスに就て　古藤頼三（北京電報総局副局長）　6-7
本社創立三周年紀念論文募集　華北電々倶楽部　7
市外通話帯域制度の実施に就て（上）　内野貞夫（営業部企劃科回線係長）　8-11,7

学術の研究と教養に就て　抜山平一（東北帝大教授）9
国民学校に於ける科学教育としての電信電話　淡路俊徳（技術部搬送科）10-11
一般民衆の文化運動　宗介（新民会教化部長）　赤間英夫・訳　12
成吉思汗に歌へる唄　小倉東次　12-13
中国の伝説　高橋勉　13-15
〈忙中ペン〉壺中言二題　梅沢世界（天津出張所）13
支那家屋の科学性　玉谷友平（経理部営繕係）14-15
〈北支あちこち〉北支の西南角　運城　木佐貫束　15
北支あちこち原稿募集　15
泰安通信　谷口生　15
〈小説〉魯東地区　泊三四郎　16-17
趣味としての弓道　有川晴祥（電気通信学院副院長）17
四月号を読んで　A・B・C　17
昭和礼法要項　通信の部抜萃　17
北電春秋（二一）　和田総務部長　18
〈グラフ〉中国の家庭生活　19-21
〈グラフ〉天津光信＊1　22
電話局運営の話（4）　益田英治　23
興亜テスト　23
北電塔　23
鄭先生的面子〈〈Radio Drama〉＊2　村山直道　24-25
〈随筆〉わが村の記録　奥井斎松　26
〈随筆〉おしやかさま　伊藤亀寿　26-27
〈詩〉春の夜　亀井義男　26
〈随筆〉酔醒漫談　雲水散人　27
〈随筆〉河向ふの青春　宮本功　27
〈女性の窓〉散策　大畑たい　27
子供と共に　宮本興治　28-31
〈こども北電〉　29
大陸と日本映画　平井武　30-31
興亜テスト答案　30
〈囲碁〉敵味方の急所（第三回解説）七段　瀬越憲作　30-31
〈将棋〉飛角の集中砲火（第三回解説）名人　木村義雄　31
〈弾性波〉訓練　難波六郎　31
短歌募集　31
〈読書〉読書余録（六）　渡辺音二郎　32-33
〈読書〉童話　高屋正武　32
〈読書〉今月の新刊　32-33
〈読書〉教養は禁制品である　浜田建＊3　33
〈窓〉生活学校を見学して　西山君枝　34
〈窓〉戯装免費　凪英太郎　34
〈窓〉春　佐藤三造＊4　34
〈窓〉目黒無線校の思ひ出　岩津藤男＊5　34-35
〈窓〉前線偶感　福岡正弥＊6　35
〈窓〉戦線だより　呉正雄　35
〈電気通信学院のページ〉　34-35
〈支部通信〉　36-37
〈句会通信〉槐樹句会／黄城句会／天津北電川柳会

／天津俳句吟行会／句会通信に就て　38
〈編輯室〉　難波六郎　高橋綾子　吉田治　芋田吉太郎　38

＊1　「目次」には「天津独身寮スナップ」とある。
＊2　末尾に「去る四月十六日華北広播協会より華語にて放送」とある。
＊3　目次には「浜田健」とある。
＊4　目次には「佐藤三蔵」とある。
＊5　目次には「岩津藤界」とある。
＊6　目次には「福岡正弥」とある。

昭和一六年六月一日発行（第三巻第六号）

〈表紙〉　井上総裁・題字　折田勉・画
〈巻頭言〉文化の礎　半沢憲二（財産副科長）　3
川端康成氏を囲む〈座談会〉　4-5
（語る人）川端康成　平田小六
上田清也　長岡善一郎　村山直道　有田紀久滋
安部正　阿部吉男　難波六郎
社歌決定　5
歌詞　大木惇夫　5
市外通話帯域制度の実施について（下）　内野貞夫　6-9
鵲とたゝかふ　小浜碧（青島工務事務処）　8-9
〈随想〉前線出張随感　金光昭　10
〈随想〉五月の風　藤枝基　10
〈随想〉インフレ其他　中本辰夫　10-11
〈随想〉奉公　服部五三六＊1　11
黄塵〈短歌〉　小泉苳三　11
〈随想〉俗想　三崎一郎　11-12
電話局運営の話（5）　益田英治　12-13
〈随想〉帰国随想　安部正　12-13
〈随想〉黒眼鏡の女と黒犬　粟村中　13
「北電子供会」生る　14-15
〈童謡〉イタリヤの兵隊さん　木村好之助　15
〈こども北電〉　15
北京近代科学図書館を訪ふ　吉田治　16-17
興亜テスト　17
北電春秋（22）　和田総務部長　18
〈特輯グラフ〉中條山脈を征く通信隊の精鋭　19-22
晋南前線〇〇にて　芝烏太郎　20-21
〈北電俳壇　富安風生選〉　23
田中鵬生（北京）　服部五三六（北京）　酒井青二（青島）
渡辺音二（北京）　伊藤渓靄（北京）　里深弘（天津）
関口藤堂（北京）　鳥越路昌（北京）　矢真白（北京）
青野正明（北京）　三上智仙（北京）　芋田孤竹（北京）
竹本鮑之助（北京）　佐々木国之助（北京）
清水房一（北京）　高岡斗柿生（北京）　伊藤秋村（北京）
鹿毛三姓（北京）　鈴木黙人（青島）　御牧保男（北京）
柳生正義（北京）　三造（濰縣）　角一烏村（北京）
大陸俳句小感　富安風生　23

〈北電歌壇　小泉苳三選〉　23
木村好之助（北京）　野中義治（太原）　大野英二（天津）
矢真白（北京）　谷川巧（済南）　峰口生（北京）
海口生（北京）　西谷宏（学院）
選後に　小泉苳三　23
〈随想〉食貨志に就て　渋川悌美　24
〈北電塔〉　24-25
興亜テスト答　25
嘱目〈短歌〉　染野厳雄　25
〈随想〉数の世界　工藤直衛　25-26
〈随想〉橋岡伍長の戦死　青野正明　26-27
〈弾性波〉禁止　難波　26
〈詩〉振動／ふたたび振動　亀井義男　26-27
〈詩〉子供に与ふ　近木健弍　27
〈随想〉鯉のぼり　岸本春美　27
〈北支あちこち〉ミナト塘沽　岡村軍一　27
〈忙中ペン〉職員資格検定試験に就て　有田紀久滋（営業部企劃科）　28
〈これはうまい〉　28
北京食道楽　和田芳男　28
慶林春と西田さん　沼田生　28-29
本場の味　平岡暁　29
青島と天津　秋田徳三　29
新体制向の宴会　小堀泰一郎　29
うまいものの話　西崎健男　29
〈私の研究〉中国女性への関心　高橋綾子　29
〈女性の窓〉手紙　住吉艶子　30-31
〈読書〉今月の新刊　30
〈読書〉読書余録（七）　渡辺音二郎　30-31
〈読書〉トルストイの『懺悔』について　高見文昭　31
電鍵生活（キイ・ライフ）〈俳句〉　田中鵬生　31
第一回職員登格試験問題　32
日本に学ぶ　王淑賢　32
俺は北電警備隊　仁朗　32
〈窓〉誤字　佐藤三蔵　32
〈窓〉愚威　小畑克己　32
〈窓〉五月号を読んで　ＡＢＣ　33
〈窓〉妻へ［詩］　矢真白　33
小さな廃物利用　秋田徳三　33
〈電気通信学院のページ〉　33
ピエロより機関銃へ　日本映画に望む　平井武　34
謡曲の話（１）　鶴田生　34-35
〈将棋〉軽快な手筋（第四回解説）　名人　木村義雄　35
〈囲碁〉一ノ二に妙手（第四回解説）　七段　瀬越憲作　35
〈女性詩苑〉　35
古い手帖から　遊子（電気通信学院）　35
お空に／朝　紫葉子（北京電話総局）　35
異国の秋／追憶　美恵（天津電話総局）　35
空と雲　川原洋代（北京電話総局）　35
〈編輯室〉　35

〈支部通信〉　36-37
〈句会通信〉福田桂史氏歓迎句会／初夏　福田桂史
／天津北電句会／天津北電川柳会／建部木人氏
歓迎句会／雑詠　建部木人／句会通信に就て　38
〈編輯後記〉　難波　38

＊1　目次には「服部勇」とある。同一人物か。

本研究は科学研究費補助金基盤研究（C）「日中戦争期華北の未公開資料の調査・公開と総合的研究」（課題番号 21K00315）（代表者・戸塚麻子）及び「中国国家図書館所蔵の主要日本語雑誌（戦前期）の総目次作成」（課題番号　20K00357）（代表者・竹松良明）の研究成果の一部である。